「黄金虫」における腐敗するもの／しないもの
：時間の経過と永続性について

髙瀬　祐子

はじめに

エドガー・アラン・ポー（Edgar Allan Poe）の作品には死体が付き物である。登場人物が殺人を犯したり、殺人事件を解決したり、殺されたり、生き埋めにされたり、よみがえったりする。時には語り手の死によって物語が幕を閉じることもある。ポーが殺人を描いた多くの作品において、殺人は作品の冒頭あるいは終盤のクライマックスとして起こる。探偵小説においては、殺人事件を解決することこそが物語の大筋である。

一方、世界初の暗号小説としても名高い「黄金虫」（“The Gold Bug”）は、没落貴族ルグランが偶然発見した財宝の在り処を示した暗号を解読し、従者のジュピターと語り手を従えて宝探しに乗り出し、見事財宝を発見する物語である。登場人物たちが探すのは死体でも犯人でもなく、財宝が眠る場所である。

近年、ポーをめぐる研究書誌において、場所は注目すべきテーマの一つである。2018年に地理学的・空間的文学研究（Geocriticism and Spatial Literary Studies）というシリーズの１冊として出版された『ポーと場所』（*Poe and Place*）という論集は、ポーと作品の舞台や彼が実際に住んだ場所などから、作品の再読を試みる非常に興味深い１冊であった。

この論集において、場所は、ポーが実際に暮らし、訪れたことのある地理的な場所（Geographical Places）、実在しない想像上の場所（Imaginative Spaces）、ポーが足を運んだことはないが実在する場所（Imagining Spaces）等に分類され、ポーの場所に対する意識や感覚を様々な角度からあぶり出している。

スコット・ピープルズ（Scott Peeples）はポーの場所感覚について、様々な土地を転々としたポーは放浪者であり、短い生涯の中でどこか特定の場所に根をおろすことはなかったと指摘する（“No Direction Home” 5）。ポーに

はホームと呼べるような場所はなく、短い期間暮らした場所が複数ある。その一つに「黄金虫」の舞台となったサウスカロライナ州サリバン島がある。ここは先述した『ポーと場所』の中ではあまり取り上げられなかったが、おそらくそれは本作がポーの他の作品と比較して場所との関係性が大きく異なるからだと思われる。

本作において、場所は作品の舞台として出来事が起こった空間というだけでなく、本作の大筋である「宝探し」という行為そのものが「場所探し」である。ルグランが発見した暗号とは財宝の場所を示す記号に他ならない。

ケネス・シルバーマン（Kenneth Silverman）が本作の財宝発掘の場面は死体の発掘を彷彿とさせると指摘しているように、ポーの「宝探し」において、財宝の隠し場所を探すことは「死体探し」でもある（208）。ルグラン一行は宝探しの途中で複数の骸骨を発見する。「黄金虫」は宝探しをしていたら死体も発見してしまった物語である。しかし、死体が見つかったら犯人探しが始まる推理小説と異なり、「黄金虫」は財宝探しの物語に終始する。

ポーが作品を執筆する際に、様々な作品から換骨奪胎していたことはよく知られているが、本作も例に漏れずワシントン・アーヴィング（Washington Irving）やロバート・モンゴメリー・バード（Robert Montgomery Bird）の作品から着想を得ている。そもそも海賊キャプテン・キッド（Captain Kidd）が隠した財宝は当時の読者の興味をかき立てる関心事であり、常に売れる作品を意識して執筆していた商業作家ポーならではの題材だと言える。しかし、アーヴィングの*Tales of a Traveller*ではキャプテン・キッドの宝探しのエピソードの中でネイティブ・アメリカンの頭蓋骨が見つかるものの、死体は登場しない。

バードの*Sheppard Lee. Written By Himself.* においては、シェパード・リーはキッドの隠した財宝を発見する夢を見る。リーは夢の中で棺桶を掘り当てるが、棺桶の中身は金や銀などの財宝で、死体が発見されることはない。「黄金虫」において穴掘りをしていると複数の骸骨が発見されるというプロットは、ポーが独自に差し込んだ可能性が高い。しかも、ルグランによる推論に従えば、この死体はキャプテン・キッドによる殺人であるという線が濃厚である。

死体をどこかに埋めて隠蔽すること、時には死ぬ前に埋葬してしまうことなど、殺人や死体に関して繰り返し作品の中で描いたポーが、財宝だけでな

く死体も一緒に地中に埋まっている物語を書いたのは、いかにも彼らしいと言える。しかし、「黄金虫」における死体はきらびやかな財宝の影に隠れてひっそりと見つかり、死体を合図とするかのようにすぐに財宝が見つかるため、その後もほとんど言及されない。宝探しのプロセスにおいて骸骨が見つかる展開やキャプテン・キッドによる殺人を匂わす結末はポーらしいと呼べる一方で、殺人とその隠蔽あるいは犯人探しを作品の中心に据えている他の作品と比較して、「黄金虫」における死体の扱いはポー作品の中で異例である。本稿では、「黄金虫」において財宝とともに骸骨／死体が見つかることに注目し、「黄金虫」の再読を試みる。

1．腐敗する死体

ポーの死体や殺人にまつわる作品は枚挙にいとまがないが、いくつかの作品における死体と殺人の表象について確認し、「黄金虫」における死体表象を考察する手がかりとしたい。

「ヴァルデマー氏の病症の真相」（“The Facts in the Case of M. Valdemar”）で描いたように、ポーは人が死に腐敗していく様子に格段に興味を抱いていたことでも知られている。ポーの死体表象における特徴の一つは、腐敗が進む様子を描写している点である。

1843年に発表されたポーの代表作「黒猫」（“The Black Cat”）と「告げ口心臓」（“The Tell-Tale Heart”）の二作は、どちらも語り手が殺人を犯し、その死体を壁の中や床下に隠蔽するも、家を訪れた警官に自らが死体の在り処を暴露してしまうという点において似た構造を持つ。しかし、その死体の隠蔽方法や表象の細部には微妙な違いがあり、「黒猫」では語り手が壁をステッキで叩き、妻の腐乱した死体[1]が現前する。一方「告げ口心臓」では、語り手が老人の死体をバラバラにし床下に隠蔽する様子は描写されているが、語り手の罪の告白で物語の幕はおろされ、死体が再度登場することはない。

世界で最初の探偵小説とも評される「モルグ街の殺人」（“The Murders in the Rue Morgue”）をはじめ、名探偵デュパンが活躍する三つの作品のうち、傑作と名高い「盗まれた手紙」（“The Purloined Letter”）には死体は登場しない。「モルグ街」と「マリー・ロジェの謎」（“The Mystery of Marie Roget”）では、死体が発見されることで謎解きの物語が始まり、死体発見時

の様子は詳細に描写されるが、物語は謎解きへと移行する。

デュパンは登場しないものの、ポーの探偵小説の系譜に置かれる「お前が犯人だ」（“Thou Art the Man”）における死体表象は興味深い。解決したと思われた事件に関して、すでに腐敗がはじまった死体[2]が犯人を告発するという手段で真犯人が暴かれるのである。真犯人を暴き、死体にそのような仕掛けを施した探偵役兼語り手がいるわけだが、死体そのものに犯人を言い当てるという役割を与えたことは、現代の推理小説におけるダイイング・メッセージにも似て非なる特殊な死体表象である。

生き埋めにしたりされたりする物語[3]が多いのもポーの特徴だが、厳密に言えば「生き埋め物語」に死体は登場しない。「アッシャー家の崩壊」（“The Fall of the House of Usher”）のマデラインは地下の棺に埋葬されるが、その後棺から這い出て、血に染まった姿でロデリックと語り手の前にあらわれる。彼女の衰弱した姿は「生き埋めから逃れようとした苦闘の跡」であり腐敗とは異なる（“Usher” 416）。

ポー唯一の長編小説である『ナンタケット島出身のアーサー・ゴードン・ピムの物語』（*The Narrative of Arthur Gordon Pym of Nantucket*）では、オーガスタスの腐敗がグロテスクに描かれている。

> It was then loathsome beyond expression, and so far decayed that, as Peters. attempted to lift it, an entire leg came off in his grasp. As the mass of putrefaction slipped over the vessel's side into the water, the glare of phosphoric light with which it was surrounded plainly discovered to us seven or eight large sharks...(*Pym* 127)

死期の近づくオーガスタスの身体が腐敗し黒くなる様子が描写され、死後、ピータースが腐敗した死体を持ち上げると足が捩げてしまう。

ピムが亡きロジャースの腐敗した死体を模倣した仮装をする場面もある。

> As soon as I got below I commenced disguising myself so as to represent the corpse of Rogers. The shirt which we had taken from the body aided us very much, for it was of a singular form and character, and easily recognizable——a kind of smock, which the deceased wore over his other clothing....The streak across the eye was not forgotten, and presented a most shocking appearance. (*Pym* 78-79)

ここでは、「お前が犯人だ」の死体を利用する方法を逆転させ、腐敗した死

体の恐ろしい見た目を、生きているピムが真似ているのだ。

「黄金虫」では、土に埋められ白骨化した複数の死体が発見される。

> In a few seconds he had uncovered a mass of human bones, forming two complete. skeletons, intermingled with several buttons of metal, and what appeared to be the dust of decayed woollen. (825)

死体発見時の記述はわずかにこの一文のみだが、この一文から二体の骸骨、つまり二人の人間が埋まっていたこと、さらに服を着たまま埋められたであろうことがわかる。死体が腐敗した後に骸骨になった状態で発見されると同時に、埋められた人間が身につけていたと思われる衣服の布や金属のボタンが発見されている。

ポーが複数の作品で描いたような死体が腐敗する様子はなく、本作にはすでに骨になった死体が登場する。「黄金虫」の土の中では、腐敗し骨になる人の体と、劣化しても元の形を残している金属でできた金ボタンやウールという比較だけでなく、まったく腐敗していない財宝が発見されるのである。となれば本作の土の中で、腐敗するもの、しないものという対比が生じる。

2. 腐敗しない財宝

ルグラン一行が発掘したお宝は、金貨、ダイヤモンド、ルビー、サファイヤなどの宝石類や黄金の装飾品など様々だが、特筆すべき点は、金属はすべて金だという点である。宝石類を含めても、財宝のほとんどは鉱物である。語り手は、お宝が入って埋められていた木製のチェストについて、以下のように描写している。

> During this interval we had fairly unearthed an oblong chest of wood, which, from <u>its perfect preservation</u> and wonderful hardness, had plainly been subjected to <u>some mineralizing process</u>—perhaps that of the Bi-chloride of Mercury. (825-26 emphasis mine)

木製の箱には地中に長く埋められていたことから、塩化水銀による“mineralizing process”、すなわち鉱化作用が起こっているが、直前に発見された白骨死体と異なり、完璧な保存状態を保っている。加えて、ポーは財宝を指す単語として “deposit”[4]を使用している。“deposit” は現代では銀行等の預り金という意味が真っ先に浮かぶが、金や石炭などの埋蔵物という意味もある。

OEDには、「黄金虫」が出版された1843年前後に “the deposit mines” や “the deposit gold” という形容詞的な使用例があるだけでなく、地中に埋まる鉱物を意味する “the mineral deposit” という使用例もある。ポーが財宝を意味して使用した “deposit” は、金や石炭などの鉱物を連想させる言葉である。地中に眠るのは腐らない財宝だけではなく、そもそも地中には財宝が眠っているのである。

本作の中盤において、ルグランはジュピターをチャールストンに遣いに出し、そのついでに語り手に手紙を届けさせるが、お遣いの目的は “scythes” と “spades”[5] を買うことである（814）。さらに、ルグランの言葉には “mattock”[6] も登場する（844）。ルグランは、キャプテン・キッドは穴掘りに使った “mattock” を一振り、二振りして、穴掘りを手伝わせた者たちを殺したのではないかと推理する。無論これらは地面に穴を掘るための道具だが、19世紀中葉のアメリカにおいては石炭採掘を想起させる道具でもある。1830年に石炭を燃料とするアメリカ最初の実用蒸気機関車が走ったのは、本作の舞台でもあるチャールストン、サウスカロライナ運河鉄道であった。さらにポーが本作を執筆したフィラデルフィアの位置するペンシルベニア州は、19世紀石炭採掘の中心地である。

ピープルズは、フィラデルフィアは1830年代に石炭、蒸気、運河、鉄道に囲まれた工業都市となったと指摘する（*The Man of the Crowd* 77）。当時のペンシルベニア州で発行された新聞には “coal” や “coal mines” といった炭鉱関連の言葉が数多く並び、フィラデルフィアで生活していたポーにとって、石炭は蒸気船や蒸気機関車として身近にあっただけでなく、炭鉱や坑夫たちに関する情報も日常的に目にしていたに違いない。また、1844年に発表した「軽気球夢譚」（“The Balloon-Hoax”）には石炭ガスを使用した気球が登場し、この気球はサリバン島に到着する。

本作が発表された1843年頃、石炭を始めとする鉱物は、アメリカの工業化に欠かせない重要な地下資源であった。新聞などにおいて、“mineral” という単語は “wealth” と結びつき、「鉱物資源」を意味する “mineral wealth”[7] として数多く使用されている。鉱物は富をもたらすもの、あるいは富そのものとして、この２つの言葉が結びつくのは、決して偶然ではないだろう。

1830年代から40年代にペンシルベニアで発行された新聞記事には “mineral wealth” という言葉を数多く見ることができる。急速に進められる鉄道建設

を背景に、工業化が進み、マニフェスト・デスティニーのもとに拡張するアメリカ社会において、目に見えて広がる領土は、同時に地下にある目に見えない鉱物資源を取り込んでいくことを意味していた。

ルグランはキッドのお宝がまだ地中に埋まっているはずだと確信し次のように言う。“But that Kidd's accumulations were immense, is well known. I took it for granted, therefore, that the earth still held them;... (834 emphasis mine) この “them” は財宝のことを指すが、ルグランのこの台詞はまるで地球に眠る地下資源のことを意味しているようではないだろうか。この文脈において “the earth” は地中という意味で使用されているのは明らかだが、一方で地球全体の地下に、まだ見えない富としての鉱物資源があることを予感させる。

ポーは時間の経過とともに腐敗し、はかなく消える人間の肉体と腐らない鉱物を並置しただけでなく、土の中に眠る地下資源という壮大な未来の財宝[8]を予見していたのかもしれない。

3. 腐敗しないテクスト

ポーが腐る肉体に対して腐らないものとして配置したのは、宝探しの要となる「財宝」だが、暗号の記された羊皮紙もまた「腐敗しないもの」である。ルグランが発見した暗号は紙ではなく羊皮紙に書かれている。ルグランは羊皮紙の「耐久性」と「永続性」に注目し、暗号は「意図的に耐久性のある羊皮紙に記録されたのだろう」と推測する（831）。ルグランが偶然手に入れた羊皮紙を、本作の背景にあるアメリカの硬貨と紙幣をめぐる論争から考察してみたい。硬貨と紙幣をめぐる論争とは、すなわち腐敗しない金属と耐久性のない紙との論争でもある。

本作には、1837年の経済恐慌の影響が色濃く見られることは、すでに多くの批評家たちに指摘されている。マーク・シェル（Marc Shell）は、紙幣支持者たちは、貨幣支持者を指す “gold bugs” に対して “paper money men” と呼ばれ、紙幣論争とは「実質的なモノとそのモノが作り出す記号の関係に収斂する」と言う（*Money, Language, and Thought* 5-6）。シェルは、「正金の支持者たちは金に価値の実質を結びつけ、紙を「非実体的な」記号として蔑んだ」と指摘し、「紙の価値と紙幣の額面との間にほとんど何の関係も

ないことを、アメリカ人は重々承知していた」と指摘する（シェル『芸術と貨幣』92-93）。この関係が見えないからこそ、物質そのものに価値のある貨幣を支持する “gold bugs” が生まれたのである。

このような硬貨と紙幣の論争の最中において、羊皮紙の特性は注目に値する。破れたり燃えたりする紙と異なり、羊皮紙は紙と同じように使用できるが鉱物のように劣化しにくく腐らない耐久性を持つ。永続性という観点から見れば、紙幣と硬貨の中間に位置している。

さらに、ルグランが発見した羊皮紙には暗号が記されており、暗号を可視化するためには、熱を加える必要がある。この行程に関し、ルグランは金属の塊を意味する “regulus” という単語を用いて、金属を溶剤で溶かし熱を加えると文字が浮き上がると説明する（832）。羊皮紙が担う紙と鉱物の間の中間領域的な役割は、金属を用いた化学変化を用いて暗号が書かれているという点において、ますます高まる。

硬貨と紙幣の論争とは、記号とモノの関係についての議論であると同時に、腐るもの、腐らないものの議論、つまり時間の経過によって変わるものと変わらないものの対比である。硬貨は硬貨そのものに価値を見出すことができ、時間を経ても腐らないのに対し、紙幣はそのものに価値はなく、紙幣のみで裏打ちされているかを見分けるのは困難を極める。さらに紙幣は劣化しやすく、ぼろぼろになればただの紙くずである。

このような硬貨と紙幣の関係を、本作における羊皮紙と財宝の関係に当てはめてみると、硬貨のようにそのものに価値があるのは財宝であって、羊皮紙に価値はないはずである。しかし、そこに暗号が記されているとすればどうだろうか。財宝の場所を指し示すシニフィアンがなければ、財宝にたどり着くことはできない。よって、暗号というシニフィアンそのものに、一時的な価値が生じるのである。

ルグランは羊皮紙に暗号が記されているのを発見する前に、まず髑髏と小山羊という「記号」が羊皮紙に記されているのを見つけ、髑髏が海賊、そして小山羊が「キャプテン・キッド」を意味することに思い当たる。ルグランは髑髏とキッドが記された羊皮紙に、宝の埋蔵場所を示す記録 “a lost record of the place of deposit” があるはずだと確信めいた望みを抱き、その時のことを語り手に以下のように説明する。

“But that Kidd’s accumulations were immense, is well known. I took

it for. granted, therefore, that the earth still held them; and you will scarcely be surprised when I tell you that I felt a hope, nearly amounting to certainty, that the parchment so strangely found, involved a lost record of the place of deposit." (834)

ルグランは、髑髏とキッドという記号が見つかったのに対して、宝の埋蔵場所を示す記録が見つからない状況に困惑し、"...But I was sorely put out by the absence of all else—of the body to my imagined instrument—of the text for my context" と言う（833）。ここでルグランが言う "my imagined instrument" とは、宝の埋蔵場所を示すもののことである。

しかし、宝の埋蔵場所を示すものの実体（the body）、すなわち「暗号」は、この時点ではまだ見つかっておらず、そのことにルグランは困惑しているのだ。さらに、"the body" を "the text" と言い換えている。宝探しのコンテクストにおいて、暗号こそが実体であり、それはまたテキストでもある。ルグランの言葉により、単なる記号であるはずの暗号が、宝の埋蔵場所を示す重要な実体へと、さらにはテクストへと変換されている。

本作において羊皮紙は、その耐久性や永続性という点だけでなく、まさにシニフィアンとシニフィエの関係において、中間領域的役割を果たしている。暗号が宝の在り処を示す場所を記録しているとわかった瞬間に、暗号の記された羊皮紙そのものが実体であり、価値あるテクストとなるのである。それは、紙に記された文字記号が、作品として立ち上がった時、はじめて価値あるテクストとなって、雑誌や本が売れる文学市場と同じ構図を成している。

秋元は紙幣と文学作品の類似性について、紙にさまざまな文字や図版が書き込まれることによってただの紙切れでははく、意味や価値を創出する「テクスト」となる」と指摘する（6）。一方で、その価値は読まれてはじめて生まれるのであり、読まない限り紙幣の価値を確認することはできない（秋元 6）。さらに、紙幣はコピーであり、印刷というテクノロジーによってはじめて可能になったメディアであることを考慮すれば、紙幣と文学テクストの類似性はますます高まる（秋元 6-7）。

この構図に、「腐敗するもの／しないもの」という対比を加える。すると、時間というもう一つの基準が立ち上がる。暗号の記された羊皮紙が価値あるテクストとして、時間の経過に打ち勝ち、財宝の眠る場所を指し示したこと

は意義深い。テクストが長い時間を経てもなお、その価値を失うことなく生き延びたのである。

おわりに

ポーが「黄金虫」という作品に財宝と死体を並べて埋めたことによって浮き彫りになるのは、時間の経過によって土の中で腐敗して骸骨へと変化する人間と、変わることのない財宝という対比であった。さらに地下に眠る財宝は、地下資源という壮大な未来の財宝のメタファーとなり得る可能性もある。ポーはその他多くの作品の例に漏れず、本作にも死体を登場させたが、それは犯人探しをはじめるための惨殺死体ではなく、腐敗する死体でもなく、おそらくキャプテン・キッドによって殺されたと推測される白骨化した死体であった。

暗号が記されていたのは腐らず、耐久性に優れた羊皮紙であり、暗号と羊皮紙の関係性からは紙に文字を印刷することで、作品としての価値が生じる文学テクストとの類似性が浮かび上がる。一方で、ポーが編集者として携わっていた雑誌業界において、文字が印刷された紙は商品として消費され消えていく。

では、腐らずに発見された骨はどのように考えることができるだろうか。本作では、骨となった死体が登場するだけでなく、キッドを示す印として髑髏が羊皮紙に描かれ、宝探しの過程においても髑髏は重要な役割を果たす。人間の肉体は死ねば腐るが、骨は残る。羊皮紙や金属と同様に、骨には永続性がある。

宝探しの過程において、『悪魔の玉座』から見える対象物は「小さくても白いものでなければならない」とルグランは説明する。

> To be visible from the Devil's seat, it was necessary that the object, if small, should be *white*; and there is nothing like your human skull for retaining and even increasing its whiteness under exposure to all vicissitudes of weather. (843)

「ありとあらゆる気候の激変にさらされる」、すなわち時間の経過に耐え、「白さを保つばかりか増していくのは人間の頭蓋骨の他はない」とルグランは主張するのだ。

キャプテン・キッドが百年以上も前に残した暗号が羊皮紙に残されていたように、すぐに腐敗してしまう肉体と異なり、骨は残る。本作において、ポーは時間の経過で肉体が腐敗する様子ではなく、腐敗せず残る骨を描き、その白さを強調している。白い骨は、ポーが物語を書き記し、印刷し、出版し、金銭を得ていた紙のようである。しかし、特にポーが主戦場としていた雑誌は、一定の期間で次々に世に出ては消費され消えていく消耗品である。

ポーは命尽きればすぐに腐敗の始まる肉体の脆さに、消費され消えていくあまたの文学作品の儚さを重ねつつ、時間が経過しても消えることなく、その白さを増す骨に惹かれたのではなかろうか。本作においてポーが描いた腐敗するものとしないものの対比が示すのは、肉体と財宝であり、紙幣と硬貨であり、娯楽として消費される物語と、何百年経っても読み継がれていく物語である。ポーがこの世を去ってから150年以上経過した今もなお、腐敗することも消えることもなく、多くの読者を魅了し続けている彼の作品こそ、腐敗しないものかもしれない。

＊本論文は、ポー学会第12回年次大会において行った研究発表「地中へ向かう想像力――「黄金虫」における場所／place」を出発点とし、大幅に改定・加筆を施したものである。
＊本研究は、JSPS科研費（20K12977「アメリカ文学における不動産表象――家をめぐる情動と欲望」）の助成を受けたものである。

注）

1 「黒猫」では壁に埋められた妻の死体は以下のように表現されている。The corpse, already greatly decayed and clotted with gore, stood erect before the eyes of the spectators. (859)

2 「お前が犯人だ」における腐敗した死体表象は以下の通りである。the bruised, bloody body and nearly putrid corpse the murdered Mr. Shuttleworthy himself. It gazed for a few moments, fixedly and sorrowfully, with its decaying and lack-luster eyes, full into the countenance of Mr. Goodfellow; uttered slowly, but clearly and impressively, the words — “Thou art the man!” and then, falling over the side of the chest as if thoroughly satisfied, stretched out its limbs

quaveringly upon the table. (1057)

3 「早まった埋葬」（“The Premature Burial”）では生き埋めの恐怖に取り憑かれた語り手が生き埋めの事例を数々並べたのち、船底で眠りについたことを忘れ、生き埋めにされたと勘違いする。「息の喪失」（“Loss of Breath”）は息を奪われた主人公が語り手となる一風変わった生き埋め物語ではあるが、やはり生きたまま埋葬された物語の一つに数えられるだろう。「アモンティリャードの酒樽」（“The Cask of Amontillado”）では、主人公は骸骨だらけのカタコンベに因縁の相手を閉じ込め生き埋めにするが、語り手は生き埋めにする側であり、生き埋めにされた側がその後どのような運命を辿ったかは不明である。

4 OEDでは、名詞のdepositの第3義として以下のようにある。Something deposited, laid or thrown down; a mass or layer of matter that has subsided or been precipitated from a fluid medium, or has collected in one place by any natural process.

5 ジュピターと語り手は以下のような会話をする。“Him de syfe and de spade what Massa Will sis pon my buying for him in de town, and de debbils own lot of money I had to gib for em.” “But what, in the name of all that is mysterious, is your ‘Massa Will’ going to do with scythes and spades?” (814 emphasis mine)

6 “mattock” の含まれる本文は以下の通りである。...Perhaps a couple of blows with a mattock were sufficient, while his coadjutors were busy in the pit; perhaps it required a dozen—who shall tell?” (844 emphasis mine) “mattock” は、宝探しの際に宝と共に発見された白骨についてルグランが推測する場面で登場する。ルグランはキッドが財宝を埋める際に、この秘密に加担した仲間をすべて殺してしまったのではないかと予想する。その際に、地面を掘るために持っていたつるはしで一、二発ぶちかましたのだろうと。

7 Library of Congressの新聞データベースで調べると、“mineral wealth” という語句のヒット数は1830年代から急激に増加する。1835年から39年では238件だが、1840年から44年では581件と２倍以上にはね上がる。さらに1845年から49年では982件ヒットする。“mineral resources” という語句も同様に1830年代から使用件数の上昇が顕著に見られる。

このようなデータからもアメリカにおいて、1830年頃から地下資源への注目、そして活用が飛躍的に伸びていることがわかる。

8　本作出版から16年後、エドウィン・ドレーク（Edwin Drake）が、ポーが住んでいたフィラデルフィアと同じく、ペンシルベニア州タイタスビルで油田の掘削に成功し、エネルギー革命が起こる。現代においても、シェールガスやオイルサンドなどの地下資源をめぐる欲望は尽きることがない。

引用文献

Peeples, Scott. ""No Direction Home": The Itinerant Life of Edgar Poe." *Poe and Place*, edited by Philip Edward Philips, Palgrave Macmillan, 2018, pp. 3-18.

---. *The Man of the Crowd: Edgar Allan Poe and the City*. Princeton UP, 2020.

Poe, Edgar Allan. "The Black Cat." *Tales and Sketches, Volume 2: 1843-1849*, edited by Thomas Ollive Mabbott, U of Illinois P, 2000, pp. 849-59.

---. "The Fall of the House of Usher." *Tales and Sketches, Volume 1: 1831-1842*, edited by Thomas Ollive Mabbott, U of Illinois P, 2000, pp. 397-417.
訳は巽孝之『黒猫・アッシャー家の崩壊――ポー短編集Ⅰ ゴシック編――』新潮文庫を参照。

---. "The Gold Bug." *Tales and Sketches, Volume 2: 1843-1849*, edited by Thomas Ollive Mabbott, U of Illinois P, 2000, pp. 806-47.
訳は巽孝之『モルグ街の殺人・黄金虫――ポー短編集Ⅱ ミステリ編――』新潮文庫を参照。

---. *The Narrative of Arthur Gordon Pym of Nantucket*. The Penguin Group, 1999.

---. "Thou Art the Man." *Tales and Sketches, Volume 2: 1843-1849*, edited by Thomas Ollive Mabbott, U of Illinois P, 2000, pp. 1044-59.

Shell, Mark. *Money, Language, and Thought*. U of California P, 1982.

Silverman, Kenneth. *Edgar A. Poe: Mournful and Never-ending Remembrance*. Harper Perennial, 2009.

秋元孝文『ドルと紙幣のアメリカ文学』彩流社、2018年。
マーク・シェル『芸術と貨幣』小澤博訳、みすず書房、2004年。